東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2009 年 6 月 19 日

死への備え

親愛なるムスリムの皆様。私たち皆が知っているように、全ての始まりには終わりがあり、全ての生命には死があります。万物の本髄である人間も、その時がくれば当然死ぬのです。生命と同じように現実である死を受け入れないことはできるでしょうか？死は、この生の終わりであると同時に、人にとっては終わりではなく、一時的な世界から永遠なる世界への移動です。クルアーンは死とその後のことについて次のように述べています。「あなたがたが何所にいても、仮令堅固な高楼にいても、死は必ずやって来る」（婦人章第７８節）「人はすべて死を味わう。われは試練のために、凶事と吉事であなたがたを試みる。そして（最後は）われに帰されるのである」（預言者章第３５節）「大権を掌握なされる方に祝福あれ。本当にかれは凡てのことに全能であられる。（かれは）死と生を創られた方である。それは、あなたがたの中誰の行いが優れているのかを試みられるためで、かれは偉力ならびなく寛容であられる」（大権章第１－２節）「だが復活の日には、あなたがたは十分に報いられよう。」（イムラーン家章第１８５節）

親愛なるムスリムの皆様。人の一生とは、誕生によって始まり墓場まで続く旅路です。大切なことは、どこで、いつ、どのような形で向かえることになるかわからない死に対し備えをしておくことです。いつでも来てもらえるように待っている客のために家を準備しているように、死に対しても自分たちを用意のできた状態にしておかなければならないのです。私たちが目にしているように、それには順番はありません。数え切れないほどの夢を持ちつつも、ここで眠りについたあと来世で目を覚ますことになる人々がいることを考えましょう。私たちは旅人であり、いつでも呼ばれる状態にあるのです。なぜかばんの用意がなく、私たちの振る舞いは整えられたものとなっていないのでしょう。私たちの行いが記録されているノートを点検し、不足分を補おうとしないのでしょう。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。この真実に備えておくことは、それをいつでも思い起こすことによって可能です。このことも、クルアーンに結びつき、どの瞬間でも私たちの誰かを連れていくことのできる死を可投げることによって可能となります。はかない快楽が私たちを欺くことがありませんように。また死を思い起こすことが私たちを怖がらせませんように。なぜならその定められた寿命と糧をまっとうせずに死ぬことはないのです。

死を思い起こすこと、すなわち神の御前でそれまでの生き方を問われることを考えることは、一時的な快楽に目がくらんでしまうことを防ぎます。アッラーへの反逆をも妨げます。私たちの心を和らげ、甘えを取り除きます。不正や妬み、怒り、憎しみなどを消し、現世的な苦痛を軽減させ、その生涯に価値を加えます。価値が加えられない生涯とは、最も尊い資本を無駄に使う、という意味であることを忘れないようにしましょう。

親愛なるムスリムの皆様。私たちは一つの試練の中にあること、二人の天使によって、録画されているかのように全ての行動が記録されていること、これらがいつか私たちの目の前に広げられることを私たちは信じています。そして、正邪の区別が示される日に、恥と感じ後悔するようなことを行なわないようにしましょう。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）の、「全てのしもべは死んだ状態に応じて復活させられる」という言葉を忘れないようにしましょう。アッラーのご満悦を得られるように生き、よきしもべとしてそのお方のお目にかかれるよう努力しましょう。